



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「歩く文化」の復興による地域創造：エコツーリズムとフットパスの運動論
Author(s)	下休場, 千秋
Citation	CATS 叢書, 11, 99-103
Issue Date	2017-03-07
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/66698
Type	departmental bulletin paper
File Information	CATS11_14.pdf



「歩く文化」の復興による地域創造

—エコツーリズムとフットパスの運動論—

下休場 千秋

北海道大学観光学高等研究センター 教授

1. はじめに

18 世紀以降、近代社会は人間の移動方法として、それまでの徒歩に代えて鉄道、車、飛行機、船舶といった大量高速輸送機関を手に入れることができた。観光旅行は、これらの手段を用いることにより、より早く、より遠くへと出かけることが可能となり、鉄道駅の周辺地域が賑わうこととなった。さらに、20 世紀に入ると、アメリカや西ヨーロッパにおいて、大衆への車の普及によるモータリゼーションが始まり、日本でも 1970 年代から本格的な車社会が形成されるようになった。

このような人間の交通手段の変化とそれに伴う地域開発と自然破壊の進行、生活文化の変化という近代化の影響に対して、他方、それらの動きを食い止めようとする自然保護の活動や思想の確立、郷土文化の研究の動きもあった。

産業革命により急速に自然破壊が進んだ 19 世紀のイギリスにおいて、オクタヴィア・ヒル、ロバート・ハンター、ハードウィック・ローンズリーの三人により 1895 年に設立された「ナショナル・トラスト」はフットパスの運動につながった。アメリカでは、ヘンリー・D・ソローが 1854 年に『ウォールデン 森の生活』を刊行して環境保護思想をひろめ、ジョン・ミューアが 1904 年に自然保護団体「シエラ・クラブ」を設立し、ロングトレイルの形成に結びついていった。

一方、日本においても明治時代以降の近代化の流れの中で危機感を抱いた柳田国男は、1910 年に『遠野物語』を発表し、その後、日本民俗学を確立した。また、神社合祀の反対運動を行い日本人として初めてエコロジー思想を唱えた南方熊楠や、さらには、民俗学研究を志して日本中を歩いてフィールドワークを行い、1960 年に『忘れられた日本人』を出版し、後世に「旅する巨人」と称され、その後の観光学研究に先鞭をつけた宮本常一などの存在があった。宮本常一にとって苦しい旅の道中における一番の楽しみは、人との出会いにあったといわれている。

本稿では、今後、地域社会における観光の将来計画を立案するにあたり、車中心から人間中心の地域社会へと転換する必要性、すなわち、「歩く文化」の復興による地域創造について、これらの先人達がのこしたメッセージを基にして、エコツーリズムとフットパスの

運動論の側面から考察する。

2. アフリカとの出会い

私の故郷は、京都から高野山へ至る高野街道沿いの宿場町として栄えた大阪府南部の山間部に位置する小地方都市・河内長野である。日本古来の修験道や社寺巡りといった聖地巡礼が盛んに行われ、これらの聖地巡礼に関わりのある社寺や街道が現在も数多く残されている。休日には、周辺の 1,000m 前後の山々にハイキングに出かけて自然を楽しみ、社寺の境内で遊んだ記憶がある。

しかし、近代化する社会の動きに、筆者自身の幼少時代の思い出を重ね合わせてみると、モータリゼーションの進展により、子供たちの遊び場であった道路が、瞬く間に車の通行のために占領されてしまった覚えがある。18 才で運転免許証を取得し、車の便利さと自由な移動の魅力に取りつかれ、車のない生活が考えられないものとなっていった。その後、現在に至るまでの 40 年間以上、車社会の中で生活をするのが当たり前ようになっていく。

芸術系大学の学生時代には、エコロジカルプランニング（地域生態計画）について学び、人間の幸福と自然生態系がもつ生命の美しさについて理解を深めた。私が専門的バックグラウンドとする地域生態計画学とは、環境アセスメント、環境ガバナンス、コモンズ論などにに基づき、地域の生物多様性保全、景観美の保全、自然災害の未然防止を前提とした地域社会の持続的発展を目指す将来計画を立案するために必要となる計画・合意形成プロセスについて研究するものである。

その後、筆者の博士論文の研究テーマは、アフリカのカメルーン共和国北西州の人口数万人の一首長国における生活文化の保全と継承であった。フィールドワークのために、1986 年に初めてアフリカ大陸に足を踏み入れて以来、現在まで 30 年間以上にわたり、断続的にはあるが現地を訪れ、地域の人びとの生活変容について調査を行っている。カメルーンの農村部でも、貨幣経済が浸透して自給自足の暮らしが消えつつある。しかし、電気、ガス、水道、道路、マスメディアといった社会基盤整備がなされていない所も多い。近代化の恩恵をあまり受けていないカメルーンの農村部での生活と、日本の近代化した生活を比較すると、日本の物質的な豊かさを実感する一方、人間にとっての精神的な豊かさ、幸福感が必ずしも、それに比例していないことに気づくのである。

アフリカへ調査に行くと、町の道路には人があふれている。歩く人、遊ぶ子ども、路上で商売をする人などがいて大変活気がある。それに引き換え、日本の町では、車は走っていても、駅前周辺、限られた繁華街、大規模商業施設を除き、歩いている人を見かけることが多くはない。観光地においても、道を歩く人が多い場所は活気があるが、車やバスを駐車場に停めて、限定された観光地や観光関連施設周辺だけを歩き、町を歩く人が少ない所は寂れている。今、路地が残り、歩いて居住に必要な機能を充足することができるコン

パクトシティの概念に合致した地域の人気が高まっている。

アフリカと日本を比較することにより、観光創造は地域創造であると感じる。車中心の地域づくりから、徒歩や自転車で移動そのものを楽しみ、多様な体験をすることができる地域づくりが、地域の活性化に結びつき、新しい観光を創造することにつながると確信する。

3. 北海道との出会い

筆者は札幌に居を構えてまだ 1 年足らずである。その間、札幌市に拠点をおくある環境保全 NPO が主催するフットパス関連のツアーや催しに何回か参加させていただき、札幌市内の藻岩山周辺、豊平川、野幌森林公園や道北の豊富温泉などの道を歩く機会があった。そして幸いにも、札幌近郊には身近な自然が残り、北海道内には雄大な自然や広大な農牧地が広がっていることに気づいた。また、先住民族のアイヌ文化や開拓の歴史を刻んだ文化が各地に残されていることを知った。それらの価値に気づくためには、実際に自分の足で歩くことが必要であることを改めて実感したのである。

現在、北海道では明治以降の近代化のひずみが現われ、人口や利用客の減少に伴う JR 路線の廃止計画を始めとして、道内空港の民営化、高速道路の建設計画といった交通網の再編計画が大きく進みつつある。インバウンドによる外国人観光客の増大に対応できる観光地域計画の提案が求められている。そこでは当然、交通の安全性、利便性、快適性が求められるが、さらに、新しい観光創造を目指すには、滞在時間を増やし、地域の自然や文化資源を有効に保全・活用しながら、それらに付加価値を与えることが求められる。そのため、歩く魅力を有する地域づくりを通して、「歩く文化」の復興が欠かせない考える。北海道にはエコツーリズムやフットパスによる地域づくりの適地が数多くあるのである。

4. エコツーリズムとフットパスの運動論

筆者の「エコツーリズムによる地域創造研究」は、前述したように、アフリカ、カメルーン共和国において、1980 年代後半から始めたフィールドワークを起点にしている。エコツーリズムは、1980 年代にアフリカや中南米の自然保護地域における環境保全と地域住民の暮らしを守るために観光振興を図るところから発展してきた概念である。私は新しい地域創造のあり方として、グローカル（地球規模で考え、地域において活動する、Think globally, act locally）の視点から、地域環境保全、地域文化の伝承と創造、地域活性化という三つの目標を同時に達成することを目指すエコツーリズムについて研究と実践を行っている。

また、歩くこと（foot）と小径（path）とが語源であるフットパスはイギリスにおいて 15 世紀以降に始まる領主・地主による土地の囲い込みに対する小作農や都市住民の、土地

や自然に対するアクセス権を獲得する法的闘争の歴史というコモンズ論の流れの中から生まれてきた概念である。イギリスの各地には地域の風土に触れることができるフットパスのコースが整備され、ルートマップや道標が作成されており、多くの人々がウォーキングを楽しんでいる。

訪日観光客が増大する現代社会において、外国人観光客を受け入れる側の我々には、異文化交流の場となりつつある地域での自律的な発展を目指す地域創造が求められている。そこに、「歩く文化」を取り入れることにより、必然的にカフェや休憩スペースなどの交流空間が生まれる。地域住民が主体となり、地域の固有性を生かした持続的で責任あるエコツーリズム、フットパスは、地域の国際化に対応する観光創造において有効な手段となり得る。

さらに、国内外において、地震、津波、暴風雨、洪水、噴火、斜面崩壊、干ばつなどの自然災害が多発し、地域には自然災害に対する様々なリスクが存在している。そのため、防災、減災、復旧、復興に関する地域計画の必要性が高まっている。地域が有する自然災害に対する脆弱性を評価する手法と、自然災害に対する地域の抵抗力を高めるための方策について考察し、観光が防災復興に果たす役割について検討することが必要である。そのためには、幼少期から地域の自然環境に親しむための教育プログラムを導入し、地域の自然環境、歴史、生活文化の持続的な保全と継承を前提として、地域の活性化を図るために観光を導入する際に配慮すべき内容について、具体的な事例を取り上げて考察することが望まれる。エコツーリズム、グリーンツーリズムなどのサステイナブルツーリズムのあり方について理論的、実践的な検討を加えることにより、観光の意味を問い直すことが重要である。

観光は人間や情報の動きを活性化し、地域に新しいコミュニケーションの場を創造する。エコツーリズムは、地域が有する自然と文化の個性を重視し、地域の魅力を高め課題を解決し、持続可能な発展を目指すものである。観光創造学は、地域の魅力と課題を発見するところから始まる。地域を診断する（診察）能力、地域の課題（病気）を発見し、必要な解決策（治療）を提案する。観光創造学を学ぶものは、地域計画者（地域の医師）としての素養が求められ、対症療法的な治療を施すだけでなく、地域の自律性（地域の自然治癒力）を発見し高める東洋医学的な計画提案をすることも必要である。エコツーリズムの概念を基本として、地域ランドスケープの捉え方、地域環境を評価する環境アセスメント、地域の民族文化・民族芸術の価値を把握するための方法、コミュニケーション能力を高めるための異文化理解等について、アフリカにおける調査研究事例や関連する文献を基にして学生と議論し、観光の意味を問い直したいと考えている。観光創造は地域創造であり、持続可能な地域づくりの主体は地域住民であるとの立場から、エコツーリズム、フットパスを一部の専門家が取り組む計画手法と捉えるのではなく、地域住民や多様な立場のステークホルダーの地域を愛する熱意と行動力を基本とする運動論として評価し、それらの意思を立案プロセスに取り入れた地域生態計画に関する研究を推進してゆきたい。

5. 観光とは「美」を探求する旅である

人間が生きる喜びは、「美」に触れ、「美」を体験することにより生まれる。観光とは多様な「美」を探求する旅のことであり、観光の醍醐味は「美」を巡る五感を使ったコミュニケーションにあるといえる。美しい風景を眺め、美味しい料理を食べ、心地よい音楽を聴き、さらに、地域性豊かな生活文化を生きてきた人びととの感動的な出会いを体験することが、新たな記憶を創出し、次の観光行動へとつながってゆく。このような多様な「美」を探求するエコツーリズムをはじめとする旅を地域において創造することが観光創造学の役割ではないだろうか。

筆者にとって美しいものは、まず宇宙に浮かぶ水の惑星・地球である。写真でしか見たことがないが、多くの宇宙飛行士が宇宙空間から眺める地球の美しさを語っている。しかし、人間はこの美しい地球の自然を破壊し、生態系に影響を及ぼしてきた。美を探求する旅を実現するには、かけがえのない地球における自然の不思議さと魅力に気づく必要がある。

また、この地球上には、多様な民族文化をもった人びとが暮らしている。人びとが生活の中から生み出してきた地域性のある文化や芸術には、人間が創造したものとしての、あるいは、生きざまとしての美しさがある。これらの人間と文化の「美」にふれることが観光の醍醐味でもある。ところが自然と同様に、この文化の多様性も失われてきている。自然と文化の多様な美しさの価値について理解を深めることが観光創造への鍵となる。

近代化により進展した車中心の社会が得た利便性と共に被った損失は、交通事故、環境悪化、コミュニティの分断など多大である。エコツーリズムとフットパスの運動が目指すものは、「歩く文化」の復興により地域が失ったものを取り戻し、地域の自然と文化が有する「美」の多様性を追求してゆくことにある。それが、地域が有する多様な「美」を探求する観光の意味を問い直すことにもなるのである。